

1.はじめに

先の大戦後から日本は一貫して重農主義路線を安全保障の中心に据えてきたが、これは農業が国家にとって非常に大きな産業であった事と、農業に従事する人間が人口の8割を越していた関係上、農林省(現在の農水省)が巨大で絶大な予算と権力をもっていた、(今も少なからず持っているが)事にも関係する。

しかし日本は現在、世界有数の工業国であり、工業製品輸出国であるので、保護主義的な重農主義は通用しなくなっている。しかも一貫した重農主義は停滞から縮小して行く日本のマーケットに於いて、政府統計とはかけ離れた供給過多を起こし、農地で作物を廃棄する生産調整や、消費地での余剰食品の大量廃棄現象を生んでいる。過剰供給は耕作地の縮小と放棄を生み、全国に耕作放棄地を拡大していることは市場経済から見るとごく当たり前のことである。事実、戦中戦後を通して日本の食糧供給が需要を大幅に下回ったことなどなく、むしろ産地にある農産物がエネルギー不足により消費地に届かない問題や、届いても煮炊きが出来ない問題の方が深刻であった。先の大戦の目的も、敗退の原因も国内の食料不足によるものではなく、燃料不足による機動力の喪失に有った。

日本の安全保障上のアキレスけんは、現在も技術の進歩や食料品の輸入増などで供給がいや増している食糧ではなく、かつて保有していた秋田油田や九州北海道の炭鉱すらなくなって、そのほとんどを輸入に頼っているエネルギーであるとの前提に立つ。そして、各地に広がる耕作放棄地は飽和している食糧のためではなくエネルギーの為に使われるべきとの論を展開する。